

仏舎利塔巡拝余録

光 地 英 学

一

長い時日の間に日本国内百余ヶ所の仏舎利奉安所を巡拝、その余録ともして左に記載を試みる。

約二〇年位以前になろうか、郷里富山にて高岡市伏木仏舎利塔を始めて参拝した。その折の感激、次いで、姫路の仏舎利塔をも、姫路市訪問の都度参詣、同じく非常なる感動であった。尚姫路で聴いた話しであるが、以前の姫路市長さんが、インドのネール首相から仏舎利を拝受、その仏舎利を己が邸宅に奉安して置いたところ、奉安中、家が微妙な揺れ方をした。それで大変感動した市長さんが、市の名所にもと仏舎利塔建立を市会に問うたところ、万場一致の協賛を得、市の仏教会も托鉢醸金して、恐らく全国一ともいふべき現在の仏舎利塔建立となったといわれる。

私はこの両所の仏舎利塔参拝より受けた感激己み難く、全

国の仏舎利塔を隈無く参拝して廻ることを発願した。それは今年より四年前のことであった。先ず、吉野の金峯山寺奉安の仏舎利をといたのであった。というのは、修験道の本山、役ノ行者開創寺をとかねて念じていたところでもあったからである。念願の金峯山寺に詣でたのは昭和五八年六月十日の夕刻近くであった。一応参詣を終えて、ふと向うの山を望むと仏舎利塔らしいものが見られた。当地の人に訊ねると、仏舎利であるとのこと、それで、急いで、山を降り仏舎利塔のある山へと道無き道を草を分けて登ったことである。それは一に仏舎利塔巡拝の念に発しているからに他ならない。この為に、腰を痛め、家に帰って後、接骨医に通院したことであったが、それから一週間後、九州方面の仏舎利塔参拝の予定を変更することなく、腰痛の全治しないまま保険証を懐中にして出発した。

九州での最初の訪問先は、宮崎である。駅前から平和公園

行バスに乗車、終点で降車、東京で調査して置いたこととて、平和公園の石段を昇って公園に着いた。同所に八紘一字の大塔があるが、仏舎利塔らしいものは皆目見られない。幾人に聴いても知らぬ存ぜぬという。仏舎利塔を知らぬということ、何と不思議なことかと思いつつ、折しも道路工事の中の人夫の示すまま、工事監督者に聴いたところ、全く方向違いの場所に来たことを知り、又宮崎駅に逆戻りし、工事監督の教えの如く青島行のバスに乗ること、約四〇分、漸く仏舎利塔に近い青島に降り立った。仏舎利塔の所在を聴取、その方向の山に向って歩き出すと、驟雨沛然、塔のある山道を登る。豪雨の為、狭い山道が小川に化し、薄暗い中を独り上り坂を辿る。女子供だったら泣き出すのではないかとも思った程であった。

九州の最初はこの如くであった。余の仏舎利塔の在るのは殆んど山上。山登りは荷物を背負うて平地を行くように、身を屈め乍ら、痛む腰に耐えつつ進む、右の脚の痛みに止まらず、左の脚の痛苦にもさいなまれる。自ら釈尊の在すところに一歩でも近付いて死ねば本望と、我と我が身に云い聴かせつつ心細くも自らを叱咤激励して進む、一人行く山路に不如鳥が鳴く、予期せぬ声に、慰さめられること一入。

九州の仏舎利塔巡拝の最後は天草の仏舎利塔であった。ここ天草島には本渡と新和との二ヶ所所在るが、本渡仏舎利塔参

拝を終え、本渡市のホテルを早朝発ち、新和町一宮地の天草仏舎利塔へとバスの人となる。バスより降りて塔迄麓から約八キロ、山路の舗装の尽きる頃、一台のトラックが止った。トラックの中から声あり、何れへという、仏舎利塔へと申すや、山の路崩れの為、新和町役場派遣で、開通作業に行くのであるが、塔迄、大変なこと故、これに乗るようにと、有難いこととて便乗させていただく。天草仏舎利塔からの眺望は洵に他に比類するもののない程の景観である。すなわち鹿児島・長崎・熊本三県の島嶼郡の寄り添うた不知火湾しらぬいの絶景は全国一といっても過言ではない。塔守の丸本上人は、この地出身、当地に塔を築くに際し、山の樹を伐採して堀立小屋を作り、その中で一週間断食して釈迦如来に祈願をして後、当塔建立に踏切った由。

塔参拝中、否、我が生涯を通じ忘れ得ないことと云えば、愛知県設楽町焼山の延寿山相輪様参拝の時のことであろう。それは今も記憶に鮮烈な昭和六〇年十月十五日のことである。豊橋からバスに乗ること二時間、それからタクシーにて塩津温泉に行く、その裏山延寿山に在るのが当相輪様である。道無き道を秋草を踏み分けて登る、相輪様をつまびら詳かに観察、記録、終った時にはすでに夕刻、下山ということになったが、もう路は判らない。色々と迷う。そのうち草の茂みの中に足を踏み入れた。路と思ったのが、路ではなく谷であった。三

メートルもあつたらうか、下に落ち込んだ。そこは石で、腰を強打、そのままずると谷を滑り落ちて大なる滝壺に陥ち込む、腰迄水に浸り、急遽這い上る。視界全くの暗、谷の上は樹木の茂みで空を覆う、一寸先も否、かいもく不明、判らぬまま、判らないからただ岩にしがみつくのみ。自ら憶う、

弥々我が人生もこれ迄、今まで、死人の枕経を多く読み来るも、今度という今度は自分で己が枕経を読んで置こうと、口誦する、蓋し幸い命が助かるならば、釈迦牟尼仏六年苦行の一端を味わせて貰つたということにでもと。随分時が経つたことであつた。すると、遙か彼方に懐中電燈らしいものが、二筋見える。「オーイ」と呼ぶ、自分は「オーイ」と答える、

「ああ谷底だ、ロープだ」という声が聴えてくる。自分の助かつたのは、塩津温泉に今夜宿泊、そして当相輪椽参拝と申して身の周りの物等を宿に預けて来たのが、助かつた決め手となつたものと考えられる。他面、かかる災難に遭つたのは、次のようなことと関連してみる余地も或いはあるようにも思はれる。というのは、この日より二日前、己が弟子が交通事故に逢つて人事不省になり、脳の手術をしたことであるが、その折、病院では命が助かるか否か不明とのこと、私は是非命を助けてやりたいと、旅行中も一心に心内で読経、み仏に祈願するところがあつた。弟子は幸い命が助かつたが、結果として、そのことと私の被災とを結びつけ、助命の一分を自

ら犠牲に於いたとも受け取れる意味のものがあるようにも思われるが、勿論これは純主観上のことに他ならない。

二

国内百十七の仏舍利奉安所は夫々特色があつて甲乙をつけ難いが、そのうち眺望上印象深いのは、前記の天草仏舍利塔を筆頭に、舞鶴港を俯瞰する舞鶴仏舍利塔、長崎港灣と山の起伏に囲まれた段々坂形の長崎市街を俯瞰できる長崎仏舍利塔、富士山を背景のもとに建つ富士仏舍利塔（静岡県御殿場市三の岡東山平和公園）、太平洋並びに清澄連山を遠望出来、周辺極めて広やか、しかも塔それ自体も壮麗の千葉清澄山仏舍利塔、それに若狭仏舍利塔（福井県三方郡美浜町日向）であるが、それは塔そのものというよりは、塔への道中である。というのは、島の点在する日本海と三方五湖を左右に見てという景色のすばらしさである。これは塔のある所の景観であるが、次は塔それ自体の壮麗をみることにしたい。

塔そのものの大きさ並びに副次的伽藍に於いては、姫路仏舍利塔の右に出るものはないであろう。次いで富士と清澄山であろうか、異つた意味で、高森（熊本県阿蘇郡高森町村山）・熱海（熱海市蘇我山）が指摘される。すなわち高森・熱海の塔の基台の周囲には、釈尊伝がカラーの浮彫を以て嵌め込まれている。実に見事そのものである。また異色のものに釧路の

塔がある。釈尊伝の浮彫りに鑄造された大型の青銅板が四面に配されている。同釧路市の名刹定光寺の大道晃仙光師の御厚意に依り、拝受した吉田仁麿著『炎の人』の当の人が、当地の中村水産会社の社長中村小三治氏であり、釧路の塔は重にこの中村氏の発願建立によって成ると云われる。今になおわが同塔の印象の強烈さは劣えるところがない。別の意味で驚嘆すべきことは、日本山妙法寺開祖、藤井日達上人の超人的とも云うべきその足跡の偉大さである。太平洋戦争後建立の仏舎利塔の全部と云わぬまでも、稍々それに近い程、大なり小なり、日達上人の影響を蒙っているのに喫驚するのみである。それら諸塔には殆んどといってよい程、日本山妙法寺の各地の称を冠した道場が附随し、その道場主が、塔のお守り役に任じている。それら所属の比丘・比丘尼は独身主義を以て一貫、師匠たる日達上人を中心とし、日達上人を敬仰すること甚大、その心情たるや洵に麗しい限りというべきである。

このような感激に充ちた半面、歎かわしい塔の実状の若干に触れざるを得ないことも己むを得ないこととして敢えて記載する。それらは佐渡の日蓮宗靈跡本山妙照寺の仏舎利塔・若狭仏舎利塔・由比仏舎利塔（静岡県庵原郡由比町入山字船場）・函館仏舎利塔（函館市青柳町）等である。妙照寺の塔の護持の怠っているのは、正住職が未だ決定していないところからで

あるようである。これは若狭・由比の場合も軌を一にする点があり、何れも現在塔守の無いことに依っている。函館の場合も稍々それに類しているのみならず、函館にては当初の計画の先細りの結果であるらしく思われる。これらのことから、国内仏舎利塔護持に就いての物心、二面の何らかの後援が必要であるように思われるが、如何であろうか。

三

次に私の仏舎利塔巡拝に於ける不思議ともいふべきいわば勝縁に触れてみたい。先ず仏舎利塔の偶然ともいふべき遭遇についてである。その一は大分県にて青の洞門へ行く途中のバスにて、仏舎利塔らしいものを車中から見て、同乗の老人に訊ねたところ、間違いもなくその塔であるとのこと。翌日、帰途に立寄ったところ、その塔が耶馬溪仏舎利塔（大分県下毛郡本耶馬溪町青ヶ丘）に他ならなかった。前記の吉野の場合も同轍であるが。

他の一は高知の竹林寺である。四国唯一の仏舎利所在と思つて徳島の海部牟岐町の正観寺を参詣し、帰途は周遊券で高知の埠頭から、東京晴海迄船でという予定であった。周遊券には、付録ともして一二の名所が添加されるが、その一に高知市の竹林寺があった。昭和六〇年六月十八日午後四時半高知発の汽船ということで、十八日はその時間迄、朝から予定が

無かったので、竹林寺を訪ねることになった。竹林寺五重塔の説明の掲示板を見ると、この塔中に仏舍利が奉祀されていることを始めて知った。帰宅後、調査をしたところ、間違ひもなく竹林寺は仏舍利奉安の当の寺院であった。偶然としては、余りにも尊いことであるとされねばならない感激の念に充ちたことである。

次は福井仏舍利塔の場合に移る。北陸路を舞鶴方面から福井に向い、福井駅で下車、足羽公園へと急いだ。公園内仏舍利塔のかなり手前の塔説明の掲示板を、流れ落ちる汗に筆記のインク字のじむのを気にしながら懸命に万年筆を走らせていると、遙か彼岸に見える仏舍利塔奉祀であろうその釈尊から、「急いで帰るように」と申される如く心耳に聴えたことである。かかる影の声ともいうべきものが、更に繰返された。疑念を懐きつつ急ぎ仏舍利塔に拝礼を遂げ帰途に着くべく道に出ると同時に、一台の自動車が止った。その車は商用のものではない素人のもので、運転台から、是非との声のあるままにその車で、無料奉仕の厚意に感謝しつつ福井駅迄送って貰った。そのことで、丁度次の巡拝場所、金沢迄の電車の時間に間に合った。思えばみ仏の声としては、符節を合するが如き尊くも亦不思議なことと云わねばならぬ憶いに住したことであった。

青森の仏舍利塔（青森市大字三内）であつたらう。車の人が

塔前で降り、鄭重に合掌拝礼して、車中の人となつて行つたこと、仙台の舍利塔（仙台市国見東山）前の幾人の人も、殆んど毎日参拝に来ますとのこと、何れも心温まる憶いのことどもであつた。

まことに仏舍利塔建立護持は仏教の特定宗派に止まらず、各宗派に涉っている。そこには全く宗派意識はない。超宗派である。釈尊なればこそと申し度い。仏舍利の国内にかくも多数奉安されていること、それがわが国のみならず、広く世界に奉祀されている、又、されつつことは、実に釈迦牟尼仏のみで、釈尊以外には皆無の全く唯一性といわねばならない。まことに釈尊の絶大なる鴻徳の然らしめるものというべきであらう。万徳円満釈迦如来と讃え奉るのみ。